

Breakthrough と Driving force

佐藤 宏子

和洋女子大学

日本国際教養学会 (JAILA) は2011年9月に設立され、2015年3月には学会誌であるJAILA Journalが発刊され、この度、本誌第8号が刊行されました。会員の皆様の情熱を注いだ研究活動と編集に携ってこられた先生方のご尽力に支えられ、JAILA Journalが専門学術雑誌として発展の道を着実に歩んでいることを嬉しく思います。そこで、JAILA Journalの刊行から第7号までに掲載された論考を本学会で共有されている「国際」、「教養」、「学際」の3つのキーワードで振り返ることによって、会員のこれまでの学術研究活動の足跡を辿り、次のステップへのヒントを得たいと思います。

JAILA Journalの創刊号から第7号には、研究論文36、研究ノート30、特別寄稿論文6、書評1の合計73編が掲載されています。このうち研究論文と研究ノートを合わせた66編（以下、掲載論文とします）の中で、英文論文が21編と3割を超えていること、国際的な視野に立った研究テーマが多数を占めていることが、JAILA Journalの大きな特徴と言えるでしょう。

また、掲載論文66編を科研費審査の小区分にもとづいて分類すると、「外国語教育関連」(38編)が6割弱を占め、次いで「英語学関連」(7編)、「高等教育学関連」(7編)、「英文学および英語圏文学関連」(6編)、「社会学関連」(5編)がそれぞれ1割前後、そして「教科教育学および初等中等教育学関連」(2編)、「日本語教育関連」(1編)となっています。このことからJAILA Journalは、科研費の「文学、言語学その関連分野」、「社会学およびその関連分野」、「教育学およびその関連分野」の3つの中区分にまたがる広範な分野の論考を掲載していることが分かります。さらに、掲載論文の研究手法は、授業の参与観察、授業実践、教科書や学習指導要領の分析、詩集・小説・映画などの作品分析、電子コーパスの計量分析、文法・音韻・アクセント・文体論・物語論による分析、アンケート調査等による統計的量的分析、半構造化面接やインタビュー調査等による記述的質的分析、調査報告書や資料等の分析、国連人口統計やJGSS（日本版総合的社会調査）の二次データ分析など多岐にわたっており、会員の研究活動は非常に多様であることがうかがわれます。

次に「教養」を研究対象または研究関心とした掲載論文としては、*Daddy-Long-Legs* における若い女性に教養を身に着ける楽しさと教養の効果を体感させる戦略を分析した論文 (Vol.1)、教養教育科目としての国際協力関連科目の教授法 (Vol.3)、日本語の文章力養成講座 (Vol.4)、米国4大学でのリベラルアーツ教育 (Vol.4)、短期留学の教育効果 (Vol.5)、演劇ワークショップによる学び (Vol.5)、ディスカバリーラーニング (Vol.6)、学修支援専門職 (Vol.6) に関する8編の論文があげられます。そして、「学際」的なアプローチは、会員と共同研究を行う健康科学の研究者が介護老人保健施設で収集したナラティブ・データを文体論 (Vol.3) と物語論 (Vol.4) の手法を用いて分析し、入所者のライフレビューと認知機能との相関性などを明らかにした2編の論文として結実しています。

さらに、JAILA Journalの第2号から第7号には特別寄稿論文6編と書評1編が掲載され、東アジア型グローバル教養教育 (Vol.2)、グローバル人材育成 (Vol.2,7)、「理系」の「教養」とは（「教養とは

なにか) (Vol.3)、医療における文学の役割および貢献の可能性 (Vol.5) 等について、「国際」と「教養」と「学際」を横断・融合した示唆に富む視点と研究成果が示されています。

以上のようにJAILA Journalの創刊号から第7号の足跡を振り返ると、JAILA Journalがこれまでに日本国際教養学会の学術的基盤を築いてきたことが明らかになります。今後さらに充実した学会誌に成長していくためには、次のステップとして、会員の研究活動を促進する研究助成事業や表彰事業の取り組みと連携していくこと、研究水準向上に向けた査読体制および時代と社会的要請を踏まえた研究と調査における基本的な倫理的配慮事項を整備していくこと、科学技術振興機構の電子ジャーナル「J-STAGE」に連載していくことなどが望まれると思います。

さらに、昨今では国連の持続可能な開発目標 (SDGs) などにみられるように、より複雑で包括的な問題の解決が社会から要請されています。こうした社会の趨勢に思いをはせ、その中で日本国際教養学会はいかなる **breakthrough** が実現できるかを、会員が共に考えていくことが大切だと思います。例えば、本学会の独自性である「国際」・「教養」・「学際」を横断・融合した社会的にインパクトの強い研究プロジェクトを創出することを中期的な目標に掲げ、そのための環境づくりとして会員の研究分野間の連携や交流を強化していくことも一案ではないでしょうか。このような学術活動の推進は、学術コミュニティにおける本学会やJAILA Journalの魅力とプレゼンスを高めるとともに、会員の一人一人が、広範な学術分野の中で自身の研究を俯瞰する機会をもち、普段の研究生活とは違う刺激を受け、新たな発想や視点に気づくための **driving force** を得るという意義もあると思います。